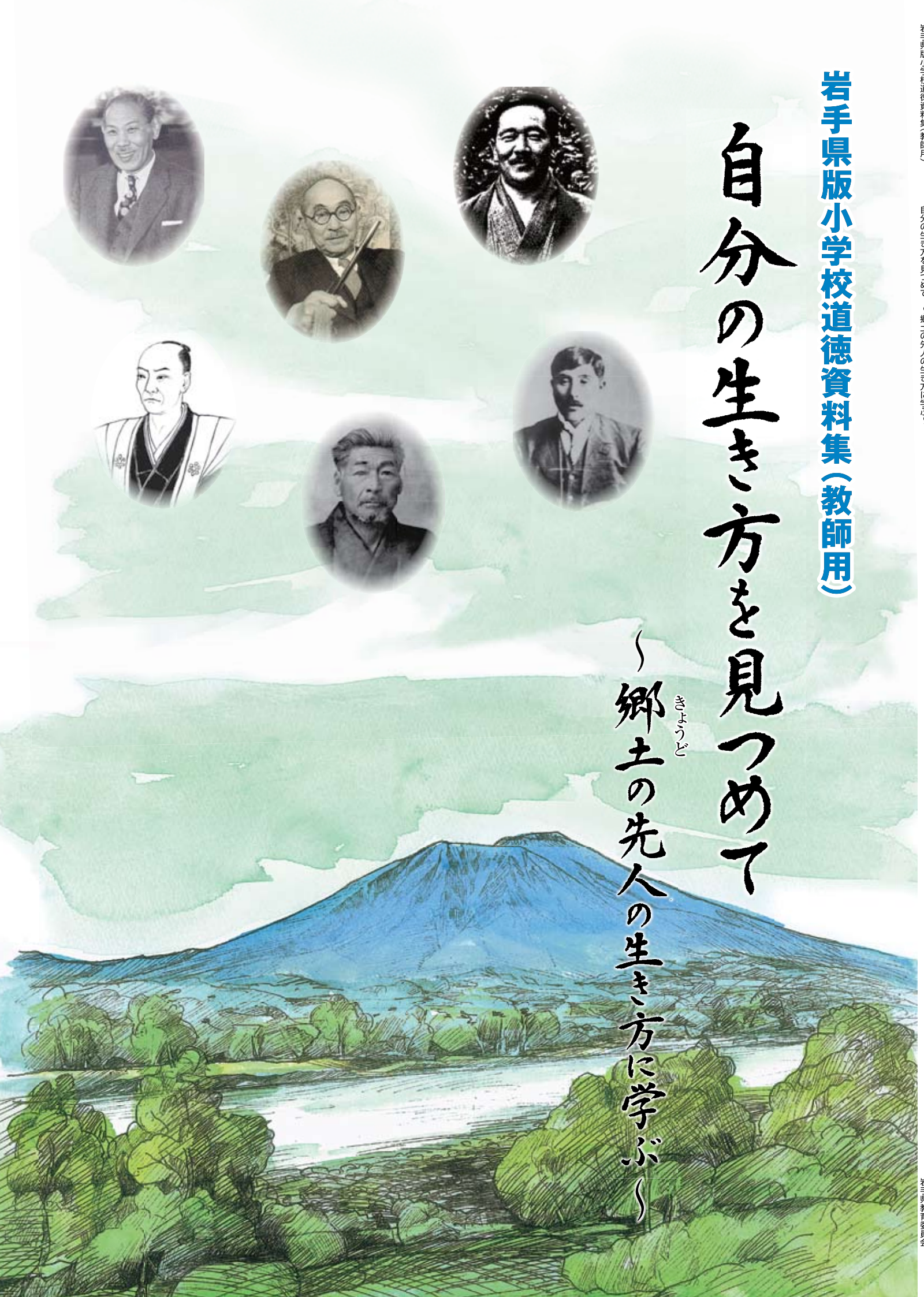


岩手県版小学校道徳資料集(教師用)

自分の生き方を見つめて

～ 郷土の先人の生き方から学ぶ ～



この資料の編集にあたった先生方（順不同）

◇道徳副読本作成委員

長 島 香乃子（八幡平市教育委員会 指導主事）
菊 池 一 章（中部教育事務所 指導主事）
内 川 千亜希（県南教育事務所 指導主事）
福 徳 潤（宮古教育事務所 指導主事）
向折戸 博 昭（普代村教育委員会 指導主事）
堀 切 茂 行（県立総合教育センター 研修指導主事）

◇道徳副読本協力委員

伊 藤 一 彦（岩手大学教育学部附属総合教育実践センター 客員教授）
佐々木 保 子（盛岡市教育委員会 教育相談員）
加 藤 孔 子（釜石市立釜石小学校 校長）

◇表紙、本文中イラスト

齊 藤 眞理子（盛岡市立黒石野中学校 副校長）

◇題 字

藤 岡 宏 章（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主任指導主事）

◇事務局

多 田 英 史（岩手県教育委員会事務局学校教育室 首席指導主事兼義務教育課長）
須 藤 孝（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主任指導主事）
飯 岡 竜太郎（岩手県教育委員会事務局学校教育室 指導主事）
水 城 久美子（岩手県教育委員会事務局学校教育室 主事）

まえがき

我が国における教育改革の大きな節目として、平成二十年三月に、新しい学習指導要領が告示されました。道徳については、平成二十一年度から、すでに先行実施されております。学校現場においては、今まさに、新学習指導要領の趣旨と改善事項に基づく授業実践に取り組まれ、あわせて道徳教育の全体計画、年間指導計画の見直し、改善作業に取り組んでいるところと思われます。

今回の指導要領改訂では、「道徳の時間を要（かなめ）として学校の教育活動全体を通じて行うものであること」などの道徳教育のポイントがいくつか示されておりますが、その中の一つに「児童生徒が感動を覚える魅力的な教材を開発・活用すること」があります。

本県におきましても、教育委員会が所管する分野の今後十年間の基本方向を示すガイドラインとして、「岩手の教育振興」を作成いたしました。その中で、「人間としての在り方、生き方について考える力の育成と心の教育の充実を図り、他人を思いやり、良好な人間関係を築くことのできる力、自然や命あるものを大切にする心など、児童生徒の内面に根ざした道徳性の育成」「岩手の先人、歴史、文化を学ぶことを位置付けた教育の構想」をあげております。

本資料「自分の生き方を見つめて」郷土の先人の生き方に学ぶ」は、このような考え方や計画に基づき、岩手県の先人を教材として、小学校高学年向けに、道徳の時間を中心に活用できるような資料集として作成いたしました。子どもたちには、この資料集を通して、自分たちと同じ自然や風土で育った先輩の、様々な困難にぶつかりながらも、辛抱強く、あるいは創意工夫をしながら乗り越えていった姿にふれることにより、今の自分と照らし合わせながら自己の生き方についての考えを深めてもらえればと願っております。また、指導される先生方の授業構想に少しでも役立てればということで、それぞれの資料に対応した「指導編」も示しました。

各小学校においては、この資料集刊行の趣旨を十分に理解し、道徳の時間をはじめ、広く活用いただくようお願いいたします。終わりに、本資料集の作成に当たり、ご尽力くださった関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成二十三年三月

岩手県教育委員会 教育長

法 貴 敬

本書の利用について

一、資料編について

(一) 本資料集は、「人（先人）の生き方や考え方から道徳的価値を学ぶ」を基本的な考え方とし、岩手県出身の先人の生き方についてまとめたものです。主に、「道徳の時間」に活用する資料としてまとめたものですが、それ以外にも、総合的な学習の時間における先人学習や郷土学習などで活用することも考えられます。

(二) 本資料集は、小学校高学年用として作成しています。岩手の子どもたちにもぜひ知ってほしい内容を精選して掲載していますが、児童の実態や年間指導計画に照らし、自由に資料を選択して活用してください。

二、指導編について

(一) 「指導展開例」は、一般的な道徳の時間の指導過程に基づいて作成していますが、さらに児童の実態、指導の内容や意図等に応じて発問や展開を工夫してください。

(二) 事前・事後の指導例についてもふれています。学校教育全体を通しての道徳教育が展開できるようになっています。

(三) 「参考資料等」は、先生方が、読み物資料の内容の理解を深めたり説話をしたりする上で活用できると思われる

事項を補足したものです。指導の参考としてお使いください。

もくじ

まえがき

本書の利用について

第一章 資料編

一	世界から認められる学者に	木村泰賢	6
二	本の虫	野村胡堂	10
三	みちのくの電信王	谷村貞治	14
四	学問は人々の幸せのために	芦東山	18
五	沖へのちよう戦	大越作右衛門	22
六	学びとったもぐりの技	磯崎定吉	26

第一章 資料編

世界から認められる学者に

木村泰賢



写真提供：東慈寺

木村泰賢は、岩手県の滝沢村に生まれ、インド仏教哲学の研究では、「泰賢よりも優れた研究はない」と言われるほどの学者です。

おさないころの泰賢は、どんなことでもだれにも負けたくなかったため、よくけんかをしました。成績は飛びぬけてよかったです。あまりにも行動が乱暴であったため、父母にはいつも心配をかけていました。とてもかわいられて育ちました。

ところが、泰賢が十才のときに、父が病気でなくなりました。収入がなくなてくらしにこまったため、泰賢は、父が勤めていた酒屋で、住みこみで働かなくてはならなくなりました。しかし、泰賢は、早起きがつらくても、つかれていても、いっしょうけんめい仕事をし、時間を見つけては、近くにある父の墓に、新しい花をそなえ続けました。

父の墓がある東慈寺の住職は、泰賢のそのような様子を見て、「泰賢をわたしの寺によこさないか。中学校に入れて勉強をさせるから。」

と母に申し出たため、泰賢は、東慈寺で子坊さんとして働き、勉強することになりました。岩手山のふもとにある東慈寺からは、そのゆう大なすがたがよく見えました。



泰賢は、東慈寺でも、いっしょうけんめい働きました。朝はだれよりも早く起き、寺の中と庭のそうじをして、みんなの朝食をつくり、かたづけもしました。東慈寺の住職とすえ夫人は、そんな泰賢を、自分の子どものようにかわいがりました。

十三才のときに、盛岡の中学校へ進学しましたが、しばらくたつたころ、泰賢は思い切つて、住職にお願いをしました。

「わたしは、学者になるために、もっと勉強がしたいのです。

どうか、東京の中学校で勉強をさせてもらえませんか。」

「お前は、寺の住職では満足しないだろうから、東京に行って勉強をしなさい。」

そう言つて、住職は、泰賢の願いをこころよく聞き入れてくれました。

ところが、東京での生活が始まった翌年、住職がなくなつてしまいました。住職夫妻には子どもがいまませんでしたので、泰賢はなやみました。

「後をついで、寺の住職にならなくてはいけない。東慈寺にもどろうか。でも、このまま勉強を続けたい。」

泰賢が深くなやみ続けているとき、そのすがたを見たすえ夫人は、

「自分の目標に向かい、東京での勉強を続けなさい。」

と泰賢をほげました。その一言を聞いて、泰賢は、

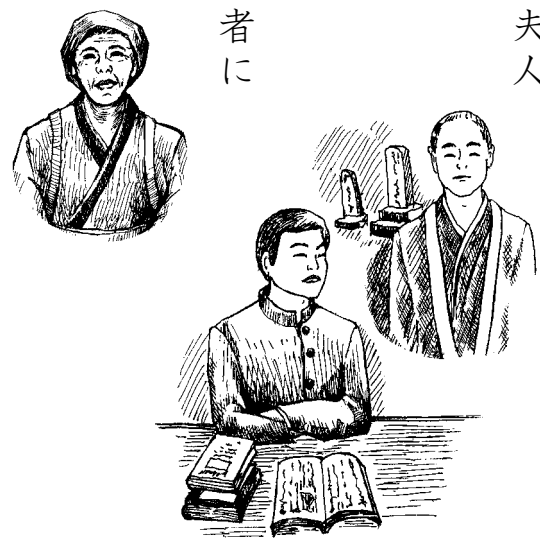
「このまま勉強を続けて、世界から認められる、りっぱな学者になろう。」

と固く心に決めたのです。

中学校卒業後は、大学に進み、学費のために塾で英語を教えながら、自分も英語の勉強にはげみました。

大学での成績がとても優れていたため、さらに、東京帝国大学へ進学して勉強を続けました。そのと中で、外国との戦[※]そうが始まり、外国の病院で働かなければならなくなるときでも、泰賢は、学問をわすれませんでした。病気やけがで苦しむ人たちの世話という、とてもつらい仕事をしながらも、いつも二さつのドイツ語の本と辞書を持ち歩きました。そして、少しの時間を見つけては勉強を続け、ついには、ドイツ語も覚えてしまったのです。

大学を卒業した後も、泰賢はそのまま大学に残り、研究に打ちこみました。昔のイン





ドの文字で書かれた資料を、何度も何度も読み返して徹底的に調べ、インドの歴史や仏教の考え方をわかりやすくまとめていきました。

その研究が認められ、四十二才になったとき、東京帝国大学の教授となりました。ついに泰賢は、世界から認められる、りっぱな学者になったのです。

泰賢がなくなってから、九十年以上がたった今でも、泰賢の研究は、世界中の人に語りつがれています。そして、泰賢は今、子どもをすごした東慈寺でねむっています。東慈寺から見える岩手山のゆう大なすがたは、そのころのままです。

※インド 仏教哲学・・・インドに始まった仏教の考え方をまとめた学問

※住職・・・お寺の責任者の和尚

※子坊・・・お寺の見習いの和尚

※東京の中学校・・・旧制中学校のことであり、現在の高等学校

※東京帝国大学・・・現在の東京大学

※戦そう・・・日本とロシアの間で起きた日露戦争（一九〇四～一九〇五）

本の虫

野の
村
胡
堂



「長一、長一はどこに行った？」

「長一なら、また土蔵だろう。」

母が、父の言うとおりに、土蔵をのぞいてみると、男の子が本の山の中にすわって読書に熱中していました。

「長一、ごはんだよ。早くおいで。」

「うん、今いいところだから…。ちょっと待って。」

母は、「またか」と思いながらも、読書に夢中になっている息子を温かく見守っていました。この長一が、後に「銭形平次」を世に送り出した野村胡堂その人なのです。

野村胡堂は、明治十五年に、彦部村（現在の紫波町）で生まれました。

父は、日ごろからたくさんの本を買ってもとめていて、それらの本が、土蔵にぎっしりとおさまられていました。小さいころから、無口でおとなしかった胡堂は、友だちと遊ぶよりも、一人で土蔵にこもり、本を読むことを楽しみにしていました。胡堂にとって、家の土蔵は、大好きな本がねむる宝の山でした。

そのころは、テレビもラジオもない時代です。胡堂は、彦部村では見ることも聞くこともできないような日本の昔話や外国の物語の世界にアコガレ、すっかりそのおもしろさにとりつかれてしまいました。

胡堂に物語のおもしろさを教えてくれたのは、読書だけではありません。胡堂の家は、村の庄屋※しやうやのような家でしたので、いつもたくさんのおとなが出入りしていました。そのおとなたちの中で、胡堂が大好きだったのは、たみ屋※おやかたの親方でした。

「おじさん、今日もお話を聞かせて。」

「よしきた、今日はな、彦部のむかしの話だぞ。」

夜、ねる前になると、胡堂は、毎日のように親方にお話をせがみます。親方は、とても物知りな人で、次から次へと彦部の昔話を話してくれました。胡堂は、ねむいのもわすれて、目をかがやかせながら親方の話に聞き入りました。

こうして、胡堂は、土蔵の中の読書と親方の語ってくれる昔話から、物語のおもしろさに、どっぷりとつかっていったのです。



胡堂は九才になり、高等※小学校に入学しました。おとなしくて無口な胡堂は、何人かのいじめっ子にしょっちゅういじめられ、泣かされました。

「ぼくは、友だちと話すことが苦手だし、とくいなこともない。

だから、みんなにいじめられるのかなあ。」

ところが、ある日のことです。いつもは無口な胡堂が、ひよんなことから、これまでに読んだ本の中身をいじめっ子たちに話したときのことです。

「その先を聞かせてよ。」

胡堂は、物語の続きを話しました。小さいころから読書好きだった胡堂の口からは、物語がすらすらと出てきます。時に大きな声で、時に小さな声で、冒険物語を話して聞かせました。いじめっ子たちは、胡堂の話す物語の世界にすっかり引きこまれてしまいました。

「じゃあ、今日はここまで。続きは明日。」

いじめっ子たちは、ため息をつきました。

「明日も話の続きを聞かせてよ。」



「いいとも。こんな話なら、三年でも五年でも話せるくらい、話のタネはあるぞ。」

胡堂は、いじめっ子たちを前にして、初めておねをはりました。

その日から、いじめられっ子だった胡堂のまわりには、たくさんのお友だちが集まり、話をねだるようになりました。どの子も、胡堂の話に夢中になって聞き入りました。来る日も来る日も、たくさんのお友だちにかこまれながら、胡堂は物語を語りました。その顔は、喜びと自信にあふれていました。

その後、胡堂は、子どもころの読書で身につけた文学の才能を生かし、作家となつて、たくさんのお本を書きました。中でも、「銭形平次」は、テレビや映画でも放映され、大人気となりました。

胡堂は、晩年、自分にこのような才能を育んでくれたふるさと紫波町のために、たくさんのお金と多くの本やレコードを寄付しています。

※土蔵……土のかべで作られた倉庫のような建物。

※庄屋……村の代表である役人のような家。

※親方……店の代表の人。

※高等小学校……今の中学校のようなもの。その当時、小学校は四年間だった。

みちのくの電信王

谷村貞治



「・―」「―・―」「―・―」。実は、これで「イ」「ワ」「テ」と読みます。これらは、「モールス符号ふごう」といい、文章を「・(ピツ)」という短い音と、「―(ピー)」という長い音の組み合わせで表した信号で送り、受け手が、それを耳で聞き取り文章に直すという電気通信(電信)の方法です。七、八十年ほど前まで使われていた方法ですが、使いこなせる人の数は、とても少ないものでした。今の「メール」などのように、だれでも簡単に文章を作ったり送ったりすることなど、夢のような時代でした。

しかし、岩手には、そんな「夢」を現実のものにしようと、新しい機械の開発に力をそそぎ、後に「みちのくの電信王」とよばれるようになった人物がいました。岩手県の新堀村(今の花巻市石鳥谷町)で生まれ育った谷村貞治その人です。

十八才のころ、東京に出た貞治は、「電信」をあつかう役所で働き始めました。それから一年ほどたったある日のことです。貞治は、電信柱のてっぺんで、電線の修理をしていました。頭上には真っ青な空が広がっています。そこにプロペラとエンジン

の音をとどろかせながら一機の飛行機が飛んできました。
このころ飛行機は、まだまだめずらしいものでした。

「すごいものが発明されたもんだ。」

飛行機をながめながら、貞治は、自分でもおどろくほどのおねの高鳴りを感じ始めていました。

「よし。おれもこの電信の仕事で、人をおどろかすようなものを必ず作ってやるぞ。」

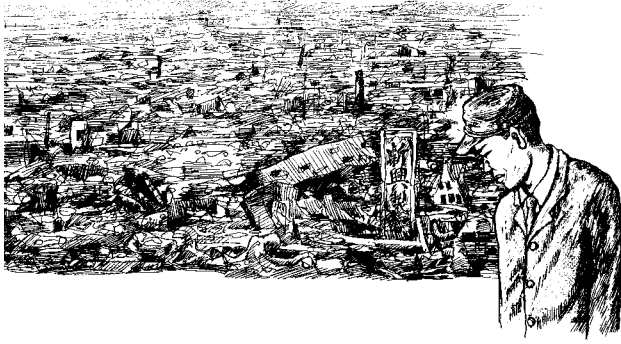
電線の修理もすっかり忘れ、小さくなっていく飛行機を見つめる貞治のおねの中には、いつの間にかそんな決心が固まっていきました。

その後、貞治は、役所の仕事を続けながら、電気学校に入学し、電信開発に必要な知識をどんどん身につけ、開発への夢をふくらませていきました。

そんなおり、貞治の運命を左右する大変なできごとが起りました。死者・行方不明者およそ十万人とも言われる関東大震災です。東京一帯は、だれもが明日への希望を失ってしまうようなひどい有り様でした。貞治も、地震が原因で発生した火災によって、住んでいた家など何もかも失ってしまいました。

ところがです。貞治は、希望を失うどころか、この大震災をきっかけに新しい会社にな





つり、ずっと思い続けていた電信開発の夢に向かつて新たな一步をふみ出したのです。そこから、貞治の研究の日々が始まりました。そして、十年近くにおよぶ研究の末、日本で初めてとなる「仮名文字電信機」を作ることに成功したのです。それまでは、たった一つの言葉を送るために、何種類ものモールス符号を打たなければならなかったのですが、この機械は、仮名文字のついたキーをおすだけで、自動的にモールス符号が送受信されるといふ、とても便利なものでした。

貞治は、東京の蒲田というところに自分の工場を建て、その後も、順調に仕事を進めていきました。

しかし、さらに大きな苦勞が貞治を待ち受けていました。太平洋戦争です。東京も大空襲にあり、百万人以上の人が被害を受けました。大震災の苦勞にも負けず、長い年月をかけて大きくしてきた貞治の工場も、一瞬にして灰になってしまいました。残されたのは、たった一枚の看板と、それをかかっていた門の柱だけでした。

「あんなにがんばってきたのに――。今回ばかりは、もう何もかもおしまいだ。」

大事に守ってきた工場を失い、これからの夢さえも見失ってしまった

た貞治は、仕事をやめる決心をしてふるさとの花巻にもどりました。

それからどれくらいたったでしょう。ある日、貞治のもとに、国から意外な知らせがとどきました。それは、「戦争でこわされた全
国の電信施設の機械を新しくしてほしい」という内容でした。これ
までたくさんの苦勞を乗りこえ、努力を積み重ねてつくり上げてき
た貞治の技術が国にも認められたのです。

新たな決意を固めた貞治は、花巻に工場をかまえ、以前にもまして、意欲的に仕事に
取り組んでいきました。そして、施設の機械を新しくしたただけではなく、世界初となる、
日本語も英語も打てる「テレタイプ電信機」や、現在の日本語ワープロ（ワードプロセッ
サー）の前身とも言われている「漢字テレプリンター」など、世の中の人々をおどろか
せるような機械も次々と開発していったのです。

こうして貞治は、その一生を電信にささげました。

いくつもの困難を乗りこえてきた貞治。そんな貞治の心を支え続けてきたものは、ずつ
と昔、電信柱の上で見た真っ青な空を飛ぶ飛行機のすがたと、その時に思いえがいた大
きな大きな「夢」だったにちがいません。



学問は人々の幸せのために

芦

東

山



現在のげんざい一関市大東町いちのせきしだいとうちようしぶたみ渋民しぶたみに生まれたあしとうざん芦東山あしとうざんは、おさないころから勉強好きでした。その当時は、「士農工商」というきびしい身分みぶん制度せいどがあり、身分のちがいによって差別さべつを受け、人々は苦しい生活を送っていました。

大きくなったとうざん東山とうざんは、※せんたいはん仙台藩せんたいはんで学者として働くことになり、ある時、殿様とのさまのおともで江戸えどに行くことになりました。そこでとうざん東山とうざんは、むろきゆうそう室鳩巢先生むろきゆうそうという有名な先生から学ぶことができました。先生は、とうざん東山とうざんの才能さいのうを認め、ある日、こう言いました。

「犯おかした罪つみによって刑けいばつを決めるのが裁判さいばんであるはずなのに、今の裁判さいばんは、身分みぶんのちがいによって刑けいばつが左右さゆうされている。このおかしな裁判のやり方を正しいものにするために、※けい刑法けいぽうの本を書きたいと思っているのだが、わたしも少々年をとりすぎた。わたしの代わりに、この仕事をやってくれないか。お前なら必ずできるはずだ。」

「わかりました。自分にどれだけのことができるかわかりませんが、いつか先生の願ねがいにかなうような本を書けるよう、学問にはげみます。」

このとき東山は、尊敬する先生からたのまれたこの仕事を、しっかりと心にきざみました。

江戸で多くのことを学んだ東山は、学問の必要性について考えるようになりました。

「世の中は、どんどん進んでいる。仙台藩にも、まずしい人でも勉強できる学校が絶対に必要だ。」

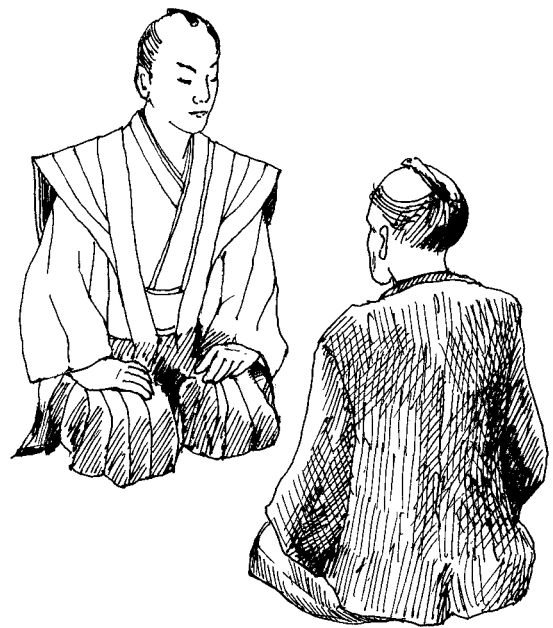
そう考えた東山は、藩に意見書を出しました。

しかし、藩が建てたのは、身分の高いお金持ちの人たちしか学べない学校でした。そこで勉強する学生や先生の席は、親の身分の順番で決められていました。

「親の身分で差別するなんておかしいじゃないか。どんな人でも学べる学校を建てるべきだし、席順だって、身分の順ではなく、年れいの順にすべきだ。」

そんな東山の意見は、仙台藩には受け入れられませんでしたが、それどころか、とんでもない考えの持ち主だということ、他人の家にあずけられ、そこから一步も外へ出てはいけないという刑を言いわたされました。

東山は、学者としての仕事も思うようにできず、つらい日々が続きました。しかし、





東山は、藩に意見書を出したことを、少しも後かいていませんでした。

不自由な生活の中で、東山は、昔、先生からお願いされた仕事を思い出しました。

「そうだ。今こそ、先生にたのまれた仕事に取り組もう。新しい刑法の本をまとめあげなければ。」

東山の頭の中には、自分に思いをたくした先生の顔がうかんできました。東山は気持ちをふるい立たせ、刑法についての本を書くことを決意しました。

原こうを書き始めて十七年、東山六十才のとき、十八巻にまとめた刑法の本、『無刑録』がとうとう完成しました。この本には、次のようなことが書かれています。

○罪を犯してしまった人にもわけがあるはずだから、そのわけをよく調べなくてはならない。

○裁判で大切なことは、裁判をする人が公平な心で、真実をよくたしかめ、すじ道を立てて判断することである。



東山が書いた『原本無刑録』(岩手県指定文化財)
(芦東山記念館蔵)

『無刑録』は、東山の死後、その考え方のすばらしさが認められ、日本だけでなく、外国の法律関係者などにも広く読まれています。

東山が六十六才のとき、藩からゆるされ、二十三年間続いた不自由な生活が終わりました。生まれ育った浪民に帰った東山は、身分のちがいに関係なく、学問を学ぼうとする多くの人々と親しく交わりました。

東山がなくなったとき、多くの人々が東山の死をおしみました。東山は、愛するふるさと浪民を見わたせる高台の墓地にねむっています。



※士農工商……江戸時代の身分制度。武士・農民・職人・商人をいう。最も上の身分とされた武士が権力をにぎり、それぞれの身分の中でも、家がらによって細かく分けられていた。

※仙台藩……現在の宮城県仙台市に中心をおいた藩。

※刑ばつ……罪を犯した者に対するばつ。

※刑法……犯罪とそれに対する刑ばつについて定めた法律。

沖へのちよう戦

大越 作右衛門



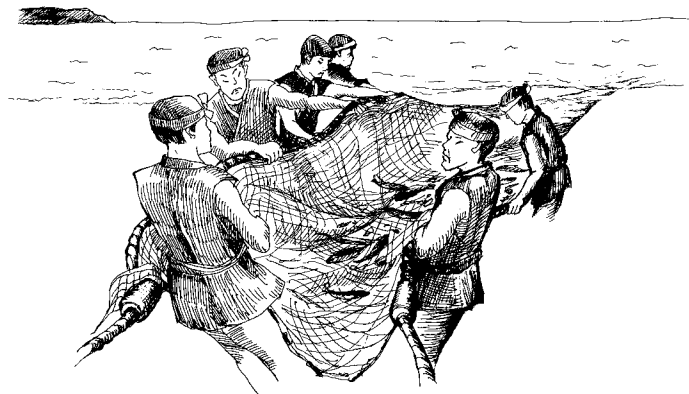
親潮と黒潮がぶつかり合う三陸沖は、世界有数の漁場です。サケやサンマ、イワシなど、季節によって多くの魚がむれをつくって、三陸沖にやってきました。

「この魚を少しでも多くとりたい。」
それは、三陸に住む漁師たちにとって、昔も今も変わらない共通の願いです。

この三陸宮古に、代々続く網元の家に生まれた大越作右衛門は、若いころから漁法の研究に大変熱心な人でした。

作右衛門は、これまで父たちが行ってきた地曳網のような漁法では、岸によってくる魚しかとれないことを、とても残念に思っていました。

「このままでは、どの家も毎日食べていくのがやっとだ。これからは、沖の魚をとれるようになるねえば……。」
作右衛門は、新たな漁法の開発を、真げんに考えるようになっていったのです。



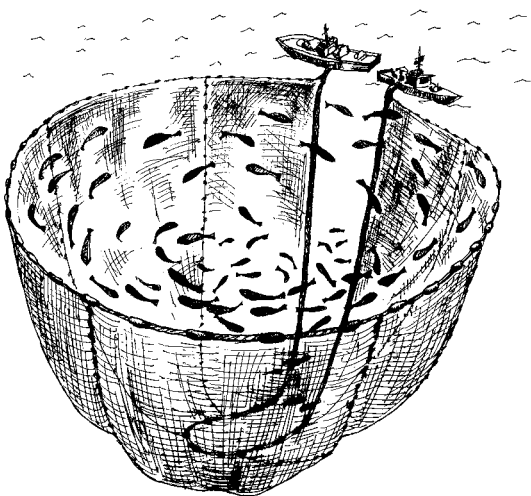
そこで、作右衛門は、まず潮の流れを観察しました。さらに、魚のおれの通り道や、その通り道のうつり変わりを調べ、それにあつた新しい漁法を試してみました。しかし、このちよう戦は失敗の連続でした。次々とかぶアイデアをもとに試してみるのが、魚はいつこうにとれません。

それでも、作右衛門は、各地の経験ゆたかな漁師から話を聞くなど、新しい漁法の研究に、さらに熱心に取り組むようになっていきました。

こうして、九年の月日が流れた明治二十一年の春、作右衛門は、ぐう然、ある本の中に、自分の運命を決める記事を見ました。それは、「アメリカ式巾着網」のかい説でした。巾着のような大きなふくろ状の網を使って、魚のおれをいっきにとらえてしまうものです。

「これだ。」

作右衛門は、すぐに網作りに取りかかりました。そして、その年の六月にはニシン巾着網を作り、それから、季節ごとにやってくる魚のおれに合わせて、何度も巾着網を作りました。しかし、魚は思ったようにとれませんでした。



「魚がみんな、網から逃げてしまってる。」

「これなら、前の網の方がいいんでねえの。」

漁師たちの文句が、作右衛門の耳にも聞こえてきます。

「やっぱり無理なんだべか…。」

そのころ、作右衛門には、心配なことがもう一つありました。それは、網を作るお金のことです。何年もかけて、新しい漁法の研究に取り組んできた結果、大越家の財産はそこをつきそうになっていたのです。

作右衛門は、その翌年、道具も船も新しくした上で、サケ巾着網を作ることを決意します。この網は、今まで以上に工夫を重ねたものでしたが、こまったことに船に乗ってくれる漁師がいません。

「あんなバカ網で、魚がとれるわけねえべ。」

これまでの失敗で、漁師たちは、作右衛門の作る網を笑いとばし、相手にしなくなっていたのです。

作右衛門は、しかたなく近くの農家の人たちを集め、漁を続けました。道具の使い方もままならない人たちによる苦しい漁でしたが、ついにその苦労が実を結びます。明治二十三年のサケ漁において、このあたりでは最も多くのサケをとることができたのです。

網あみの中でにげ場を失い、バチャバチャと水しぶきをあげるたくさんの方々のサケたち。それを見つめる作右衛門さくえもんのほほに、ひとすじ光るものが流れました。

巾着網きんちやくあみが、すばらしい結果を出すようになると、作右衛門さくえもんのところに、県内はもとより、県外からも、使い方を教えてほしいと言う人たちが、たくさん来るようになりました。作右衛門さくえもんは、そうした人たちに、巾着網きんちやくあみの全てをあますところなく教えました。

そして、しばらくすると、巾着網きんちやくあみを使う船が、大漁旗おほいりやうきをなびかせて港に帰ってくる光景こうけいを、全国各地で見かけるようになりました。

巾着網きんちやくあみについて、特許とくしよをとるようになすめられた作右衛門さくえもんは、こう言ってことわったそうです。

「おらあ、そんなものはいらねえ。魚はみんなでとればいい。」

※網元あみもと……船や網あみなどを持っていて、多くの漁師りやうしをやとって漁業ぎよぎやうを営いとなむ者。

※大漁旗おほいりやうき……漁船ぎよせんが港に帰るとき、大漁おほいりやうであったことを知らせる旗はた。

※特許とくしよ……新しい発明や改良かいろりやうをした物を、商品として売るような時に、政府が、その発

明や改良かいろりやうをした人にだけ、それを作る権利けんりを認みとめること。



学びとったもぐりの技

磯崎定吉



後に「南部もぐりの開祖」と言われた磯崎定吉は、明治五年に岩手県の種市（現在の洋野町）に生まれました。種市のあたりは、夏でも冷たい風がふくため、米づくりにはむかず、まずしい生活の家が多いところでした。定吉の両親は、彼が小さいころになくなったので、定吉は、一家のくらしを支えるために、一生けん命働きました。

定吉が二十七才のときのことです。名護屋丸という船が、種市沖で遭難しました。その船の解体作業をするために、千葉県から、三村小太郎という潜水夫がやってきました。三村は、解体作業を手伝っていた定吉を見て、

「おまえには、素質がある。おれに弟子入りして、潜水技術を習ってみないか。」と誘いました。この技術を覚えるためには、二、三年はかかると言われていました。家族のくらしを支えなければならぬ定吉は、初めはことわりでしたが、「さてよ、この技術を覚えると、長い時間もぐれて、いろいろな仕事ができるかもしれない。」

と思い、名護屋丸の解体作業をしている三か月間だけ、三村に弟子入りをすることにし

ました。

しかし、その技術ぎじゆつを覚えるのは、かんたんなことではありませんでした。三村が教えたのは、「ヘルメット式潜水技術せんすいぎじゆつ」といい、ヘルメットや潜水せんすいぐつなど、六十キロ以上もあるものを身につけてもぐります。水中での移動いどうは、潜水服せんすいふくの中の空気を調節ちようせつして行いますが、それをまちがえると、水面までうきあがったり、海底までしずみこんだりしてしまいます。その上、海中では水の重さがかかり、陸上のように自由に体を動かすことができません。体の向きを変えることもむずかしく、物を持ちあげるなどの作業さぎようにいたっては、しせいをたまちながら行うのでさらに大変でした。そのため、一度もぐっただけで、へとへとになり、

「何てむずかしいんだ。おれに覚えることができるだろうか…。」

と思うこともたびたびでした。しかし、定吉さだきちは、

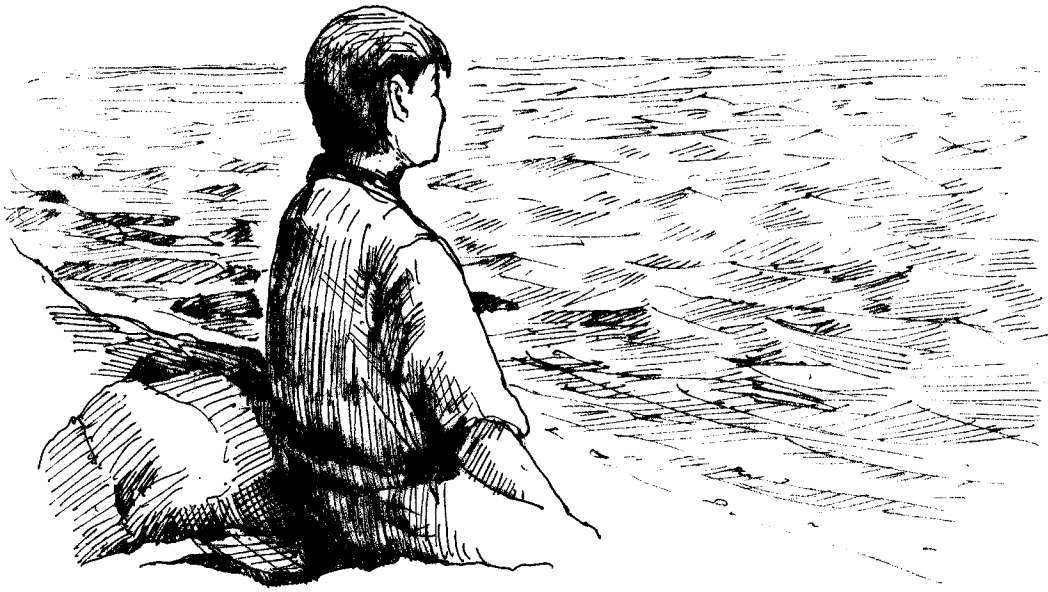
「この技術ぎじゆつを学びとれば、沈没船ちんぼつせんの解体作業かいたいさぎようなどの仕事ができるようになる。そして、

この仕事を広めれば、種市たねいちの人々のくらしが少しでもよくなるはずだ。」

と考えたのでした。

定吉さだきちにあたえられた時間は、三か月しかありません。さらに心を強くした定吉さだきちは、まわりの潜水夫せんすいふたちの動きを見て必死ひつしに覚えしました。三村みむらからのきびしい特訓とっくんにもたえ、とうとう三か月のうちに、潜水技術せんすいぎじゆつの基本を身につけたのです。

三村^{みむら}たちが帰^{かえ}ってからも、定吉^{さだきち}はさらに技術^{ぎじゆつ}をみがき、ついには、日本一^{にっぽんいち}と言われていた千葉県^{ちばけん}の潜水夫^{せんすいふ}にも負け^{まけ}ないというで前^{まへ}になりました。



ところが、当時^{とうじ}は年間^{ねんかん}を通して船^{ふね}の解体^{かいたい}の仕事^{しごと}があるわけではなく、定吉^{さだきち}の家^{いへ}のくらしも苦^{くる}しくなっ
ていきました。定吉^{さだきち}は、せつかくここまで努力^{どりよく}して
潜水技術^{せんすいぎじゆつ}を身につけたのに、

「このままでは、くらしていけなくなる。やめて
しまおうか。」

と思うようになりました。

そんなある日^ひ、定吉^{さだきち}は、ぼんやり海^{うみ}をながめてい
ました。浜^{はま}では、地元^{じもと}の人^{ひと}たちがアワビ^{あわび}とりをして
いました。船^{ふね}の上^{うへ}からもぐってはとり、息^{いき}つぎのた
めに海面^{かいめん}に上がり、またもぐっていきます。

「そうだ。これだ。」

定吉^{さだきち}は、さけびました。潜水技術^{せんすいぎじゆつ}が生^{なま}かせる漁^{ぎよ}
業^{ぎよう}に目^めをつけたのです。潜水漁業^{せんすいぎよぎよう}は、これまで行^なわ

れていた「すもぐり」とちがい、一度に長い時間もぐれるので、ウニやアワビなどをたくさんとることができました。

その後、定吉は、多くの弟子を育て、その技術を種市の人々に伝えました。こうして定吉のはじめた潜水漁業は、種市の人々のくらしに大きなえいきょうをあたえたのでした。

定吉が亡くなった後、その思いは、現在、岩手県立種市高等学校「海洋開発科」に受けつがれ、卒業生たちは、国内のほか海外でも活やくしています。種市の潜水士たちは「南部もぐり」と言われ、その潜水技術の高さは、今も国内外で認められています。



- ※開祖……一つの流派をおこした人
- ※遭難……海や山で災難にあうこと
- ※解体……ばらばらにすること
- ※潜水夫……水中にもぐって作業をする人

もくじ

第二章 指導編

一	世界から認められる学者に	木	村	泰	賢	4
二	本の虫	野	村	胡	堂	7
三	みちのくの電信王	谷	村	貞	治	10
四	学問は人々の幸せのために	芦	東	山		13
五	沖へのちよう戦	大	越	作	右衛門	16
六	学びとったもぐりの技	磯	崎	定	吉	19

第二章 指導編

世界から認められる学者に

— 木村 泰賢 —

1 ねらい

困難に出あいながらも、自分の目標に向かって努力を続けた郷土の先人の生き方から、自分で決めた目標に向かい、希望をもってくじけずに努力しようとする心情を育てる。

【第5・6学年 1－(2) 希望、勇気、不撓不屈】

2 資料について

(1) 内容

滝沢村に生まれ、八幡平市の東慈寺で育った木村泰賢が、インド仏教哲学の世界的権威となるまでの生き方を描いた資料である。奉公に出なければならなかった少年時代を経て、学者になるために努力を続けた泰賢の姿が描かれている。

泰賢の「学者になる」という目標達成のために、物心両面で泰賢を支えた住職夫妻の深い愛情にも気付かせながら、どのような生活環境にあっても、目標に向かい努力をすることの大切さを共感的にとらえさせたい。

(2) 指導上の留意点

○ 住職が亡くなり、泰賢が葛藤した場面の話し合いには、十分な時間をかけたい。「寺にもどって後を継ぐ」ことと、「目標に向かって東京で勉強を続ける」ことは、どちらも価値のある行為であり、プラスとプラスの価値葛藤場面となる。この2つの行為の根拠を考えさせながら、悩む泰賢の心情に寄り添い、すえ夫人のひとことに後押しされて、学者になる道を選んだ泰賢の心情を共感的にとらえたい。また、ここでの決意が、その後の泰賢の人生を支え続けることをおさえて、授業に臨みたい。

なお、泰賢の実際の選択は、東京に住み学問を続けながら、東慈寺の住職を勤めるというものであったが、資料中には記載していない。

○ 泰賢は、幼少期は、負けず嫌いであったために行動が乱暴であったが、学者になるための努力を重ねることで、学問だけではなく、人間としても完成されていったことを踏まえ、終末の教師説話では、その人柄の素晴らしさも紹介したい。

○ 詳しい時代背景をとらえさせるのではなく、泰賢の身に起こった出来事と、そのときの泰賢の心情や行動に焦点をあてながら授業を進めたい。

3 他の教育活動との関連

(1) 各教科

・社会「地域に関する学習」 ・国語「読書指導（先人の伝記等）」

(2) 総合的な学習の時間

「地域の先人にかかわる学習」

(3) 特別活動

「将来の自分の夢の実現に向けて」

4 出典及び参考文献

岩手の先人 第3集 「気高い理想を求めた哲学者 木村泰賢」（菅原 昭平）

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

卒業時や進級時に、将来の夢や目標について話し合わせ、夢や目標をもつことの大切さについて考えさせる。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	予想される児童の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	<p>1 将来の目標を確認する。</p> <p>○ 将来こうなりたいという目標はありますか。また、そのために、今、どのような努力をしていますか。</p>	<p>・プロ野球選手になりたい。野球の練習をがんばっている。</p>	<p>・目標の有無の実態を、挙手により確認し、目標がある児童には、どのような努力をしているかを短時間で発表させたい。</p>
展開	<p>2 資料を読んで、泰賢の気持ちや行動について話し合う。</p> <p>○ 泰賢は、どんな気持ちで、酒屋や東慈寺の仕事を頑張ったのでしょうか。</p> <p>○ 住職が亡くなったとき、泰賢は、どうして悩んだのでしょうか。</p> <p>◎ 泰賢は、東京帝国大学の教授になるまで、どんな気持ちでがんばったのでしょうか。また、泰賢が、世界から認められる学者になれたのは、どうしてでしょうか。</p> <p>3 把握した価値と自己とのかわりを考える。</p> <p>○ 泰賢のどういうところを見習って、これから生活していきたいですか。</p>	<p>・お父さんの分も頑張らなくては。</p> <p>・今までのように甘えてはいられない。</p> <p>・今まで世話になった分、後を継いで頑張らなくてはいけない。</p> <p>・後を継ぐ人間は、自分しかない。</p> <p>・何としても学者になりたい。</p> <p>・東京での勉強を許してくれた住職のためにも、勉強を続けなくてはいけない。</p> <p>・努力しない限り、認められる存在にはなれないから。</p> <p>・勉強することを進めてくれたすえ夫人や住職の気持ちにこたえるためにも、何としても、世界から認められる学者にならなくてはいけないという強い思いで、頑張りぬいたから。</p> <p>・何があってもがんばり続けるところ。</p> <p>・どんなときにも勉強を続けるところ。</p> <p>・明るく前向きなところ。</p>	<p>■挿絵「東慈寺で働く泰賢」</p> <p>・泰賢には、勉強だけではなく、何事にも精一杯取り組む姿勢があることにも気付かせる。</p> <p>■挿絵「悩む泰賢」</p> <p>・悩む根拠を考えさせながら、泰賢に共感させ、泰賢が悩んで出した決意の深さをとらえさせる。</p> <p>■挿絵「学者となった泰賢」</p> <p>・目標達成に向けた自分自身の強い意思と、その目標を認めて支える人々の愛情が泰賢を頑張らせたこと、目標をもちそれに向かい努力することの素晴らしさをとらえさせたい。</p> <p>・発表させる前に、考えを書く時間をとり、泰賢の前向きに生きる姿を、児童一人一人の言葉で表現させたい。</p>
終末	<p>4 本時のまとめとして、教師の説話を聞く。</p> <p>・泰賢の人柄についての紹介 (参考資料等参照)</p>	<p>・泰賢の素晴らしさは、その人柄にもある。努力を続けることは、人間性の素晴らしさにも影響してくる。</p>	<p>・心のノートの活用や教師自身の体験の紹介も考えられる。</p> <p>■泰賢の顔写真</p> <p>■参考資料のエピソード</p>

(3) 事後の教育活動

読書指導をして、自分の目標のために努力した人の伝記などを読むようにはたらきかける。

6 参考資料等

【木村泰賢略歴（1881～1930）】

- 1881（明治14）年 8月11日 岩手県滝沢村一本木に生まれる。幼名は二蔵。三男二女の次男。
- 1884（明治16）年 2歳のとき、一家は大更（現 八幡平市）に移住。
- 1887（明治20）年 大田小学校入学。
- 1891（明治24）年 10歳のとき、父死亡。一家離散。
父が働いていた酒造店で奉公→田頭の東慈寺で仏門に入る。
- 1894（明治27）年 東慈寺の泰山師より一字をもらい「泰賢」と改名。
- 1903（明治36）年 曹洞宗大学卒業。東京帝国大学文科大学専科に入学。
日露戦争に看護兵として従軍。
- 1907（明治40）年 盛岡出身のテル子と結婚。
- 1909（明治42）年 東京帝国大学印度哲学科卒業。成績優秀により、恩賜の銀時計を受ける。
- 1912（大正元）年 恩賜賞を受ける。
- 1918（大正6）年 東京帝国大学助教授となる。
- 1919（大正8）年 英・独留学。帰国後博士号を得る。
- 1923（大正12）年 東京帝国大学教授となる。
- 1930（昭和5）年 5月16日 狭心症により急死。49歳。

【泰賢にかかわるエピソード（※終末の教師説話に活用）】

- 幼少期に、泰賢の行動があまりにも乱暴であることを心配した母は、「悪い人は地獄におちるし、善い人は極楽に行くのですよ。」と、いつも仏教の教えを言い聞かせていた。
- 泰賢は、人間がもって生まれたものが善か悪かというような事から、仏教のもつ宇宙観も含む理論をまとめた。インド仏教の草分け的な存在である。
- 泰賢が研究した内容は、現在でも、仏教を学ぶ大学での講義内容となっている。
- 東慈寺の住職を勤めながら、東京での学問を続けた泰賢は、度々、東慈寺にもどり、仏教の考えを地元の人たちに教えるなど、地元のためにも活動が続けた。花輪線ができる前であったため、東京から田頭の東慈寺までの所要時間は、丸1日以上であった。
- 泰賢は、英語塾の給料は学資に充て、恩賜金をもらったときは、山門を作るために全額を東慈寺へ寄附した。
- 東慈寺のすえ夫人は、住職が亡くなった後、東京で勉強を続けることを決めた泰賢のために、蚕を飼い、桐の木を育てるなどして、学資を送り続けた。また、妻となったテル子も、田頭小学校の教員をしながら、東京にいる夫へ学資を送り続けた。
- 泰賢は、一緒に電車を待っていた小さい息子から「お父さん電車が来ました。」と言われ、「今の言葉を英語で言いなさい。」と言いつ返すような、厳しい父親であった。
- 泰賢は、がっしりとした体で、声は太くて力強く、隠し立てをしない明るい性格だった。難しいことがおきても、快活に笑い飛ばし、他人への細かい心配りもできた。人から頼まれたことは、いやとは言わずに何でも引き受け、全力を注いでやり通した。昼夜を問わずに仕事に追われる生活でも、訪れた客を、「話をして行け。」「泊まって行け。」と熱心に引き止めた。誰からも好かれ、尊敬される人物であった。
- 泰賢は亡くなる数日前、訪れた学生にこう言った。「麦畑の中を歩いていたら、子どものときのことが思い出されてきてね。何だか、涙ぐんでしまったよ。」これは、麦のように踏まれて伸びてきた自分の人生を思い返しての一言であると思われる。

【参照したホームページ】

YAHOO! 百科事典「木村泰賢」 岩手の文化情報大事典いわてゆかりの人々「木村泰賢」

※情報提供先：岩手県八幡平市田頭第23地割61 東慈寺

本の虫 のむら 野村 こどう 胡堂

1 ねらい

読書好きという自分の長所を生かした先人の生き方を知り、自分には自分らしいよさがあることに気付き、そのよさを伸ばそうとする心情を育てる。

【第5・6学年 1－(6) 向上心、個性伸長】

2 資料について

(1) 内容

幼い頃から、土蔵の中にある父の蔵書を読みふけた主人公の野村胡堂は、読書の魅力にとりつかれていた。さらに、胡堂の家に入出入りしている畳屋の親方がたくさんの昔話を聞かせてくれた。胡堂は、土蔵の読書と親方の語る昔話から、物語の面白さに傾倒していく。高等小学校に進んだ胡堂は、学校への行き帰りにいじめにあうが、自分の読んできた本の中身を語って聞かせることで友達の中で一目置かれる存在になっていく。その後、胡堂は新聞記者になり、作家としても活躍するようになる。幼い頃の膨大な読書量により、自分に自信をもち、さらにはそれを将来の仕事に結び付けていった胡堂の姿に共感させていくことにより、ねらいにせまっていきたい。

(2) 指導上の留意点

- 導入では、「銭形平次」の写真やビデオなどを提示して、「銭形平次」にあまりなじみのない児童にも興味をもてるようにする。そして、江戸を舞台にした話であるが、作者は岩手県出身であることを知らせる。
- 野村胡堂が高等小学校に通っていた当時は、テレビもラジオもない時代であり、児童の現在置かれている状態とはかけ離れている。その頃の活字の重みなどについて補足しながら授業を進めていきたい。
- 登下校の際にいじめに遭っていた胡堂の気持ちに共感させながら、それをね返すきっかけになった物語を語るときの胡堂の誇らしげな気持ちへとつなげていきたい。児童一人一人の中にも、自分らしいよさがあることに気付かせ、今後それを伸ばしていこうとする意欲を高めるきっかけとしていきたい。

3 他の教育活動との関連

(1) 総合的な学習の時間

「郷土の先人の生き方に学ぼう」

(2) 特別活動（児童会活動）

「読書月間の取り組み」

4 出典及び参考文献

- ・「胡堂百話」 野村胡堂 著 (中央公論新社 昭和56年6月10日)
- ・「かたくりの群れ咲く頃の」 野村胡堂・あらえびす調査会 編纂 (紫波町 平成7年6月10日)
- ・「銭形平次の心～野村胡堂あらえびす伝～」 藤倉四郎 著 (文藝春秋 平成7年9月20日)
- ・「岩手の先人（第5集）」 日本教育界岩手県支部調査研究部 編集 (日本教育会岩手支部 平成21年5月31日)

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

「岩手の先人」の読み聞かせを行い、岩手の先人への興味と関心をもたせる。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	予想される児童の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 「銭形平次」の写真を見ながら、野村胡堂について知る。 ・野村胡堂の簡単な略歴を紹介する。	・岩手にもそんなすごい人がいたんだな。	■銭形平次の写真やビデオ ・江戸を舞台にした話であるが、岩手県出身の人が書いていることを知らせる。
展開	2 資料を読んで話し合う。 ○ 土蔵の中で本を読んだり、親方の昔話を聞いたりしているとき、胡堂はどんなことを思っていたでしょう。 ○ 学校の行き帰りにいじめっ子に泣かされているとき、胡堂はどんな気持ちだったでしょう。 ◎ 友達に読んだ本のことを話してあげているとき、胡堂はどんな気持ちだったでしょう。 ○ 新聞記者になり、作家として、銭形平次が大人気となったとき、胡堂はどんなことを思いましたか。	・読書をしているとやめられない。 ・親方にお話を聞くのはおもしろいなあ。 ・いっしょに学校に行きたくない。 ・早く家に帰って本を読みたい。 ・自分の読んだ話を聞いてくれてうれしい。 ・みんなが僕を認めてくれてうれしい。 ・銭形平次の話を書くことができたのも、幼い頃の読書と故郷のおかげだ。 ・自分は、本が好きなことを生かすことができた。 ・ふるさとの人たちに、自分ができることをしよう。	■挿絵「土蔵の中の胡堂」 ・土蔵の読書から、親方の話に熱中していく胡堂の様子をつかませる。 ・学校の行き帰りに友達にいじめられている胡堂の悔しさに共感させたい。 ■挿絵「物語を話す胡堂」 ・友達が自分の話に耳を傾けてくれるうれしさと、自分の長所を生かすことができた喜びに共感させたい。 ・幼い頃の読書を、自分の生涯の仕事につなげた胡堂の姿に共感させたい。 ・胡堂は、自分が得ることができた利益をふるさとに還元したことについて、捉えさせたい。 ・書く活動を取り入れ、価値についてじっくりと考えさせるようにする。
終末	3 把握した価値と自己とのかかわりを考える。 ○ 胡堂の生き方から、あなたが大切だと考えたことはどんなことですか。	・自分のよさに気付き、それを生かそうとすること。 ・自分のよさをのばすこと。	・誰もがそれぞれ長所をもっていることを自覚させ、それを伸ばそうとする意欲をもたせたい。
	4 隣の友達の長所は何か考える。 ○ 隣の友達の長所を見つけて、お互いに知らせ合いましょう。	・運動が得意。 ・友達に親切。 ・何事にも一生懸命。	

(3) 事後の教育活動

総合的な学習の時間等で、自分の個性を伸ばして活躍した岩手県の先人について調べる学習活動を行う。

6 参考資料等

【野村胡堂と銭形平次について】

- ・日本の小説家、作家、音楽評論家。本名は、^{のむらおさかず}野村長一。小説を書く際は「野村胡堂」、音楽評論家としては、「あらえびす」というペンネームをそれぞれ使った。
- ・代表作は、『銭形平次捕物控』。昭和6年（1931年）、「文藝春秋オール讀物号」創刊号に銭形平次を主人公にした第1作が掲載された。以降第二次世界大戦を挟んで昭和32年（1957年）までの27年間、長編・短編あわせて383編が発表された。
- ・作者の野村胡堂は、文藝春秋から執筆を依頼され、構想を練っている時、たまたま編集局の窓から見かけた銭高組の看板と社章から「銭形」の名前を思いついたという。また、『水滸伝』の登場人物が小石を投げるのを得意にしていたというエピソードから、投げ銭のヒントを得たという。
- ・連載が始まった昭和6年には、早くも映画化され、特に長谷川一夫主演の銭形平次シリーズは人気を博し、昭和24年（1949年）から昭和36年（1961年）まで18作の映画が上映された。
- ・テレビでは、大川橋蔵主演による銭形平次シリーズの人気が高く、昭和41年（1966年）から昭和59年（1984年）まで18年間にわたり放映された。ドラマ史上最長の全888回という金字塔を打ち立て、ギネスブックに認定されている。他にも、風間杜夫、北大路欣也、村上弘明らが平次役を演じている。

【野村胡堂の生い立ち】

- ・明治15年紫波郡大巻村（後の彦部村、現在の紫波町）に生まれる。
- ・彦部尋常小学校を卒業後、紫波高等小学校に進む。
- ・14歳の時に、盛岡に出て、岩手県尋常中学校（後の盛岡中学校。現在の盛岡第一高等学校）に入学。同級生に、金田一京助、田子一民、及川古志郎ら。上級生に米内光政、下級生に石川啄木ら。
- ・22歳の時に、東京の旧制第一高等学校に入学。25歳で東京帝国大学法科大学（現・東京大学法学部）に入学。29歳の時に、父が事業に失敗し、大学を除籍される。
- ・30歳の時に、新聞社に入社。新聞社の仕事の傍ら、クラシックレコードの収集に没頭する。
- ・35歳で社会部長、40歳で調査部長兼学芸部長となる。新聞社の仕事の傍ら、執筆活動に力を入れ始める。「あらえびす」のペンネームでクラシック音楽の評論・紹介を行う。
- ・42歳で編集局相談役になり、主力を執筆活動に移す。
- ・45歳の時に長女を、52歳の時に長男を、58歳の時に次女を亡くす。子ども4人の内3人に先立たれることになる。
- ・49歳の時に、「銭形平次捕物控」を発表。その年に、映画化第一作が製作される。以後、75歳までに383編の「銭形平次捕物控」を世に送り出す。その他にも、少年向けの冒険小説やクラシックレコードの評論集など、多彩な分野の本を書き続ける。
- ・75歳の時に、白内障の影響で視力が衰え、執筆活動を断念する。同年、東京都に、SPレコード約7000枚を寄付する。
- ・77歳の時に、故郷紫波町の名誉町民となる。
- ・81歳の時に、貧しい子どもたちの学費を援助するために、野村学芸財団を設立する。この年、肺炎のために亡くなる。

[野村胡堂・あらえびす記念館]

<http://www.kodo.or.tv/>

みちのくの電信王 やむら ていじ - 谷村 貞治 -

1 ねらい

夢の実現のため、挫折を乗り越えて努力した郷土の先人の生き方を知り、くじけずに希望と勇気をもって前進していこうとする心情を育てる。

【第6学年 1 - (2) 希望、勇気、不撓不屈】

2 資料について

(1) 内容

主人公谷村貞治は、18歳のとき「電気通信」に関わる仕事に就く。仕事の最中、その頃はまだ珍しかった飛行機が、悠然と空を飛ぶ姿を目の当たりにし、「自分も電気通信の世界で人を驚かせるようなものをつくりたい」という夢をもつようになる。その後、関東大震災、太平洋戦争での空襲など、幾多の困難を乗り越えながらその当時の最先端の通信機器を開発していくのである。

自然災害、そして戦争。誰もが絶望感を覚えるような状況の中でも、一つの夢が原動力となり、力強く前向きに生き抜いた貞治の姿、心情に共感させていくことによりねらいにせまっていきたい。

(2) 指導上の留意点

- 導入では、「モールス符号」で表した文を提示するなどして、その当時の通信の大変さを実感させるとともに、誰でも使える通信機械を開発しようとした人物が岩手にいたこと、開発までには幾つもの大きな困難があったことを知らせ、資料内容への興味や問題意識を高めるようにしたい。
- 関東大震災や太平洋戦争等の歴史的事実に関しては、本文の写真以外にも資料を準備するなどして、その悲惨な状況を押さえ、それを乗り越えた貞治の力強い生き方に共感できるようにしたい。
- 太平洋戦争の大空襲で失ったものは、関東大震災の時とは比べものにならないほど大きいものである。それまで積み重ねたものの大きさと「残されたのはたった一枚の看板とそれをかかっていた門柱だけ」という部分の対比から、夢をあきらめる一歩手前まで追い詰められた貞治の心情について考えさせていきたい。

3 他の教育活動との関連

(1) 各教科

- ・社会 第5学年「我が国の工業生産」「情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり」
第6学年「戦争と人々の暮らし」

(2) 総合的な学習の時間

- 第6学年「郷土の先人から学ぼう」

4 出典及び参考文献

谷村貞治 著

- ・「白萩荘随談」 (杜陵書院 昭和33年10月10日発行)
- ・「この道ひとすじに - 運・鈍・根の人生 -」 (大和書房 昭和41年9月1日発行)

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

第6学年の社会科で「戦争と人々の暮らし」について学習したあとに本資料を扱うことにより、時代背景がより明確になり、そこを乗り越えて生き抜いた貞治の心情への共感がより強くなる。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	予想される児童の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	<p>1 今と昔の通信方法の違いについて話し合う。</p> <p>○ 現代の通信方法と比べてみてどう思いましたか。</p> <p>○ 今のワープロのような機械を開発した人が岩手にいたのです。どんな苦労があったのでしょうか。</p>	<p>・打つ方も受け取る方も大変。</p> <p>・とても不便な方法だ</p> <p>・岩手にそんな人がいたなんてすごいことだ。</p> <p>・完成させるまで長い時間がかかったに違いない。</p>	<p>■「モールス符号」の表</p> <p>・表をもとに、「モールス符号」を解読させることによりその大変さを実感させるようにする。</p>
展開	<p>2 資料を読んで話し合う。</p> <p>○ 飛行機を見つめる貞治のむねがどきどきと高鳴ってきたのはなぜでしょう。</p> <p>○ 関東大震災によって全てを失った貞治はどんなことを考えたでしょう。</p> <p>○ 「残されたたった一枚の看板」を目にしたとき貞治はどんな気持ちだったのでしょうか。</p> <p>◎ 戦争後、国から施設修理の依頼を受けたとき、貞治はどんな気持ちだったのでしょうか。</p> <p>3 把握した価値と自己とのかかわりを考える。</p> <p>○ 今日のお話の中で、自分にとって大切だと思ったことは何ですか。書いてみましょう。</p>	<p>・自分にはどんなものが作れるのか楽しみになってきた。</p> <p>・みんなが驚く顔を想像した。</p> <p>・自分の夢はあきらめない。</p> <p>・夢に向かって再出発だ。</p> <p>・人をおどろかせるようなものをつくるまであきらめないぞ。</p> <p>・がんばってきたことが全てむだになってしまった</p> <p>・もとのような大きな工場を作ることはもう無理だ。</p> <p>・大震災の時のようにはがんばれない。仕事はやめてしまおう。</p> <p>・自分の努力が認められた。やってきたことはむだではなかったんだ。</p> <p>・やはり「ものづくり」への夢はあきらめきれない。</p> <p>・もう一度、夢に向かってがんばろう。</p> <p>・夢というのは自分に強い力を与えてくれるものだ。</p> <p>・くじけないで努力すれば少しずつでも目標に近づくものだ。</p>	<p>■挿絵「飛行機を見つめる貞治」</p> <p>・資料の説明の他に震災の被害等について簡単にふれる。</p> <p>■挿絵「焼け野原の東京」</p> <p>・震災のときより、より多くのものを失ったことを押さえる。</p> <p>■挿絵「国から依頼される貞治」</p> <p>・空襲後の絶望感を想起させ、そのことと対比させることにより、貞治の大きな喜びをとらえさせたい。</p> <p>・貞治の生き方から学んだことについて書かせることにより自己とのかかわりを考えられるようにする。</p>
終末	<p>4 本時のまとめをする</p> <p>○ あきらめずにがんばり続けていることはありますか。</p> <p>○ 先生にも○○のような経験があります。</p>	<p>・将来の夢に向かって～を続けている。</p> <p>・～ができるようになりたいのでがんばっている。</p>	

(3) 事後の教育活動

特別活動における「学級活動」の内容 (2) ア 「希望や目標をもって生きる態度の形成」や、「児童会活動」等との関連を図り、道徳的実践につながるような場を位置付ける。

6 参考資料等

【略歴（インターネットサイト「Wikipedia」より抜粋）】

1896年3月19日

- ・岩手県稗貫郡新堀村（後の石鳥谷町、現・花巻市）に生まれる。

1916年（20歳）

- ・神田電気学校（現・東京電機大学）を卒業。
- ・中央通信局電信工夫から通信省技手に昇進。

1937年（41歳）

- ・東京市蒲田区（現・東京都大田区蒲田）に旧陸海軍指定管理工場である新興製作所を設立。所長として電信機の開発・製造に携わり、通信省からの要請を受け公衆電報用テープ式印刷電信機の研究に着手。

1945年（49歳）

- ・本社工場を岩手県花巻に移転してGHQから操業再開の許しを得て公衆用テープ式印刷電信機及び関連機器の開発、仮名文字印刷電信機の製造を開始。

1950年（54歳）

- ・世界初の和欧文三段シフト頁式印刷電信機を開発、テレプリンターの専門オペレーター養成のため工場隣接地に谷村学院を設立。

1954年（58歳）

- ・功績を評価され第7回岩手日報文化賞（産業部門）を受賞。

1955年（59歳）

- ・日本初の漢字テレプリンターを朝日新聞社と共同開発し新聞報道の機械化を実現。

1957年（61歳）

- ・電子計算機連動用のさん孔タイプライターを完成。
- ・普通科女子高等学校の谷村学院高等学校を開校。
- ・廃屋同然の状態だった盛岡劇場を谷村文化センターとして再建。

1959年（63歳）

- ・第5回参議院議員通常選挙に自由民主党（岩手選挙区）から立候補して初当選。

1965年（69歳）

- ・第7回参議院議員通常選挙でも当選し参議院議員を2期務め、政調通信部会副部長、東北地方開発審議会委員、裁判官訴追委員会委員などを歴任。

1967年（71歳）

- ・谷村電気精機株式会社を設立。

1968年4月20日（72歳）

- ・療養中の仙台厚生病院で亡くなる。「技術に国境はない」という名言を残している。

【谷村貞治が開発を手がけた機械】

- ・株式会社新興製作所HP参照

<http://www.shinko-exc.co.jp/company/history/index.html>

学問は人々の幸せのために あし 芦 とうざん 東山 あし

1 ねらい

生涯を通して公正・公平を求め続けた郷土の先人の生き方を知り、誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正・公平にし、正義を実現していこうとする心情を育てる。

【第6学年 4－(2) 公正・公平、正義】

2 資料について

(1) 内容

高学年の内容項目4－(2)は、「だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。」である。この内容項目は、低学年の「約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。」中学年の「約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。」を受けて発展してきたものである。また、中学校の「正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。」へと発展していく。

本資料では、身分の違いに関係なく、平等に学ぶことができる学問所を建てるべきだと進言したことで幽閉されながらも、罪を犯した人を公平に裁判する新しい刑法「無刑録」を書き上げた芦東山の姿や「無刑録」の内容から、だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正・公平にし、正義を実現していこうとする心情を育てることができると考える。

(2) 指導上の留意点

この時期の児童は、自分の所属する集団や社会における自分の役割や責任等についての自覚が深まり始める。しかし、その一方で、いじめ等の身近な差別や偏見に気付きつつも、だれにも分け隔てなく公正・公平に接することができないでいる。

本資料の指導にあたっては、前半部分では、仙台藩に学問所のことを進言したことで刑に処され、学者としての仕事が思うようにできない東山のつらさに共感させるとともに、進言したことを少しも後悔せず、公正・公平を求める東山の強い願いに気付かせたい。この際、上滑りな考えにならないよう、事前の教育活動として社会科の授業等で江戸時代の身分制度に対する理解を深め、当時の厳しい身分制度の中にありながら公正・公平を重んじた東山の断固たる態度の尊さに気付かせたい。

また、後半部分では、刑に処されながらも、公正・公平に正義を実現しようとする東山の使命感や信念、生涯を通して身分の違いにとらわれない姿勢を貫いた東山の生き方について考えさせることで、本時のねらいへ迫っていくようにしたい。

3 他の教育活動との関連

(1) 各教科

・社会 第6学年「身分ごとに異なる暮らし」

(2) 総合的な学習の時間

「郷土の先人」(地域の特色に応じた課題学習)

(3) 特別活動

望ましい人間関係を築く態度を育成するために、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事の活動場面との関連を図る。

4 出典及び参考文献

- ・「岩手の先人」第5集 日本教育会岩手県支部
- ・芦東山の生涯 一学問は人々の幸せのために― 一関市教育委員会

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

第6学年の社会や総合的な学習の時間に、江戸時代の「身分ごとに異なる暮らし」、「郷土の先人」について学習することで、当時の時代背景や身分制度に対する理解を深め、興味をもたせる。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	予想される児童の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	1 不公平な扱いをされた経験について話し合う。 ○ 今までに、不公平な扱いを受けていやだなあと感じたことはありませんか。	<ul style="list-style-type: none"> グループをつくるときに、仲間はずれにされて嫌な気持ちになった。 遊んでいるときに仲間に入れてもらえなくて悔しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の経験について話し合いながら資料への方向付けを図る。 学級の状況応じ、深刻な内容に陥らないように留意する。
展開	2 資料を読んで、東山の気持ちや行動について話し合う。 ○ 室鳩巢先生から仕事を頼まれた東山は、どんなことを思ったのでしょうか。 ○ 刑を受けても、藩に学問所の案を出したことを東山が少しも後悔しなかったのはなぜでしょうか。 ◎ 「無刑録」を書きながら東山はどんなことを考えたのでしょうか。 ○ 藩から許され、23年間の不自由な生活が終わった東山は、ふるさと洪民でどんな思いでみんなと交わったのでしょうか。 3 これまでの自分の経験を振り返る。 ○ 友達に公平に接することができなかったのは、どんな理由からでしょう。ノートに書いてみましょう。	<ul style="list-style-type: none"> 先生に認められてうれしい。 先生の意志を受け継いで、刑法の本を書き上げよう。 勉強をたくさんして先生のような人になりたい。 身分の違いによって裁判が左右されるなんておかしい。 自分は間違ったことをしていないから。 身分に関係なく学べる学問所が必要だという思いが変わりはなかったから。 学問に差別があってはならないから。 先生の期待に応えたい。 誰にでも公平な社会であるべきだ。 刑を与える前に犯罪のわけを調べなければならない。 公平な心で、真実をよく確かめ判断すべきだ。 学ぶことに身分の違いは関係ない。 人間はみんな平等だ。 ふるさと洪民は、わたしの学問の出発点だ。 好き嫌いで判断していたから。 自分の都合のいいことを優先していたから。 人の意見に左右されていたから。 その場の雰囲気にならされていたから。 	<ul style="list-style-type: none"> ■挿絵「東山の肖像画」 ■挿絵「仕事を頼まれる東山」 ・刑法の本を書くことへの東山の使命感をとらえさせる。 ・刑を受けたつらさに共感させるとともに、意見書を出したことを後悔せずに公正・公平を求める東山の強い願いに気付かせる。 ■挿絵「執筆する東山」 ■写真「『無刑録』」 ・「無刑録」に込められた東山の思いをとらえさせる。 ・刑に処されながらも、公正・公平に正義を実現しようとする東山の信念をとらえさせる。 ■挿絵「様々な人々と学ぶ晩年の東山」 ・生涯を通して、身分の違いにとらわれない姿勢を貫いた東山の生き方をとらえさせる。 ・資料から考えたことを基に自分の経験を振り返り、自分を見つめさせる。 ・単に経験を想起させるのではなく、その時の自分の言動を生んだ心について考えさせたい。
終末	4 教師の説話を聞く。 ・正しいと思うことを実行できずに、他の人に公平に接することができなかった苦い経験談		<ul style="list-style-type: none"> ・公正・公平な態度をとるためには、正しいことを正しいと主張する心の強さが必要であることに気付かせる。

(3) 事後の教育活動

特別活動の学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事の活動場面との関連を図ることで、望ましい人間関係を築く態度を育成する。

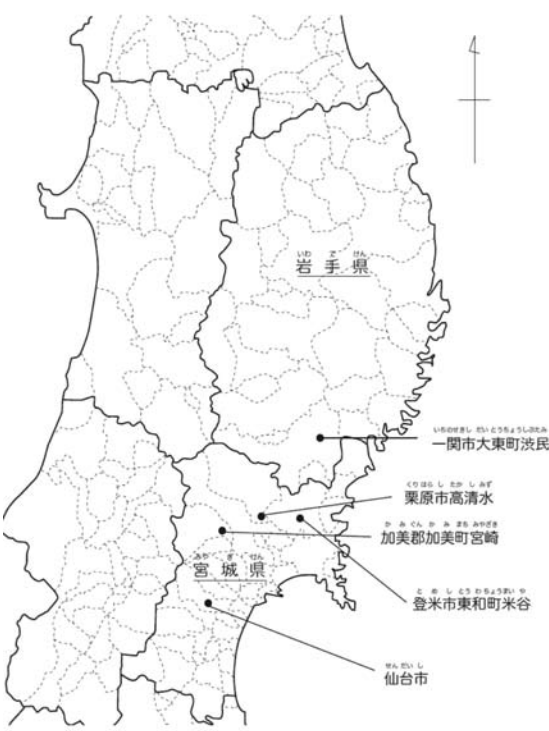
6 参考資料等
【芦東山の略歴】

芦東山にかかわる略年譜

西暦	和暦	年齢	主な出来ごと
一六九六	元禄9	1	11月23日、磐井郡東山洪民に誕生。名前は岩淵善之助。
一七〇二	元禄15	7	正法寺(奥州市)定山良光おしよの弟子となる。勝之助と名をかえる。
一七〇三	元禄16	8	伊達吉村が仙台藩五代藩主となる。
一七〇四	宝永元	9	桃井素忠から教えを受ける。幸七郎と名をかえる。
一七〇八	宝永5	13	9月、母と仙台に本を買いに行き、つづが岡で大和屋星久四郎に会う。
一七一一	正徳元	16	6月より仙台に出て大和屋星久四郎の世話になり、吉田齋軒に学ぶ。
一七二一	享保元	26	11月仙台藩の学者田辺香賢の門人となる。12月藩生となり、刀を差すことが許される。
一七二二	享保2	27	江志知辰から算学・天文学を学ぶ。
一七二四	享保4	29	7月、洪民に帰る。桃井素忠や祖父と会う。
一七二五	享保5	30	3月、幸七郎と名をかえ、番外侍となる。9月、藩主に講義をする。
一七二六	享保6	31	7月、洪民に帰る。三宅尚斎の門人となる。
一七二七	享保7	32	10月、高屋徹斎に国学を学ぶ。
一七二八	享保8	33	京都から仙台に帰る。藩主に講義をする。11月祖父が死去(74歳)
一七二九	享保9	34	3月、江戸へ上り、室鳩巢の門人となる。
一七三〇	享保10	35	「七か条の上言」を書く。
一七三二	享保12	37	2月、米谷(宮城県登米市)飯塚保安の娘と結婚する。
一七三三	享保13	38	8月、母かめが亡くなる(59歳)。
一七三四	享保14	39	8月11日、名字を岩淵から芦に、名を徳林と改める。娘が生まれる。
一七三六	享保16	41	11月、仙台藩初の学問所ができる。
一七三七	享保17	42	講堂座列に関する願いを出す。
一七三八	享保18	43	6月11日、評定所で加美郡宮崎(宮城県加美郡加美町)石母田家に「預け」を言い渡される。
一七四三	寛保3	48	冬より「無刑録」の原稿を書き始める。
一七四四	寛保4	49	7月、父一桂が亡くなる(78歳)。
一七四七	寛延元	52	飯塚保安赦免願(罪を許してほしいというお願い)を出す。
一七四八	寛延2	53	自分で赦免願を出す。
一七五〇	寛延4	55	仙台市の龍王寺の図書貸出しが許可される。
一七五三	宝暦3	58	「二十一か条の上言」を書く。
一七五四	宝暦4	59	「無刑録」18巻完成。自分で赦免願を出す。娘も赦免願を出す。
一七五五	宝暦5	60	9月、娘が赦免願を出す。娘が畑中多伸と結婚する。
一七五六	宝暦6	61	2月29日、石母田家が高清水(栗原市)に移るため、東山も引越す。
一七五七	宝暦7	62	5月、妻が赦免願を出す。
一七五八	宝暦8	63	3月21日「預け」許される。(伊達重村結婚のため)。4月に洪民に帰る。
一七六一	天明1	66	3月、仙台訪問。7月1日、東民と名をかえる。7月、建部清庵に会う。
一七六三	天明3	68	8月、一関藩主田村村隆を訪ねる。
一七六六	天明6	71	8月、本の校正のため江戸へ行く願いを出す。許可されなかった。
一七六九	天明9	74	11月16日、娘が亡くなる(33歳)。
一七七〇	天明10	75	6月、本の校正のため江戸へ行く願いを出す。許可されなかった。
一七七六	天明16	81	6月2日、昼過ぎに亡くなる。

この本では、年齢は「数え年」で表しています。
 「数え年」とは、生まれた年を一歳とし、以後正月になると一歳を加えて数える年齢。

一八七七	明治10	81	元老院から国費で「無刑録」18巻が出版される。
一九一五	大正4	74	東山の「上言」がのつた「日本経済叢書巻8、巻26」出版される。
一九二七	昭和2	71	佐伯復堂の「譯註無刑録」3巻が出版される。
一九四二	昭和17	77	千葉寛二郎・小野寺東一郎訳註「無刑録訳注」18巻が出版される。
二〇〇七	平成19	86	一関市が建設した「芦東山記念館」開館。
二〇〇九	平成21	88	4月26日、芦東山顕彰碑(東京大東会寄贈)が建ち、除幕式を行う。



- 【芦東山 ゆかりの地】
- ◇ 一関市大東町洪民・・・東山生誕の地
 - ◇ 栗原市高清水・・・東山が幽閉された地
 - ◇ 加美郡加美町宮崎・・・東山が幽閉された地
 - ◇ 登米市東和町米谷・・・東山の妻生誕の地

【『無刑録』書名の由来】
 政治史、政教を記した中国最古の歴史書『書経』の中にある一節「刑は刑無きを期す」からとったもの。刑罰を設ける目的は、刑罰が無用になることであり、そのような理想を実現するためには、教化に力を注ぎ、悪に走る者を未然に防ぐ努力が必要であるという考えの下に名づけられた。常に庶民や弱者の擁護を念頭に置く東山の間人愛と儒学者としての信念に貫かれた姿勢が窺われる。

芦東山記念館
 〒029-0521
 岩手県一関市大東町洪民字伊勢堂 71-17
 TEL 0191 (75) 3861

沖へのちょう戦

— おおこし さく えもん 大越 作右衛門 —

1 ねらい

自分の信念をもち、困難に負けず努力し続け、夢を実現させた郷土の先人の生き方を知り、自分の立てた目標に向かって、くじけずに取り組もうとする態度を育てる。

【第5・6学年 1 - (2) 希望、勇気、不撓不屈】

2 資料について

(1) 内容

本資料では、新しい漁法の開発を夢み、我が国初の米国式巾着網導入の成功を成し遂げ、旋網漁業発展の根本をつくった偉大な漁業研究家である大越作右衛門を取り上げている。自分の信念をもち、困難に負けず努力し続け、夢を実現させた人間の強さに触れたとき、子どもたちは、真の勇気を感じ取り、がんばることのすばらしさに気付くことができると考える。

大越家は代々続く旧家で大変裕福であった。それでも、作右衛門が新しい漁法の開発を決意してから成功するまでの11年間にすぎ込んだ費用は莫大なものであり、最後には家屋敷を抵当に借金をしなければ網を作ることができなかった。そこまでして作った網であったが漁師に相手にされず、農民をかき集めての操業を余儀なくされる。どれだけ作右衛門の心の中で葛藤があったか想像を絶するものがあるが、それと同時にどんな困難も乗り越える決意の強さも感じられる。

このような作右衛門の思いや行動に着目させながら、苦しい中でも自分の立てた目標に向かって、粘り強く努力する姿に気付かせ、ねらいに迫りたい。

(2) 指導上の留意点

- 江戸時代の終わり頃は、東北地方を度重なる飢饉が襲い、人々の暮らしはとても苦しいものであった。そういう時代背景に気付かせながら、沖の魚をとれるようになることが、どれほど価値のある目標であるか気付かせたい。
- 作右衛門は、米国式巾着網について、網やその他の道具の実物はもちろん、実際に漁をしている様子を見たこともなかった。書かれた文字だけが頼りであり、そのような状況の中で試行錯誤することの難しさにも気付かせたい。

3 他の教育活動との関連

(1) 各教科

- ・社会 第5学年「我が国の水産業の様子」

(2) 総合的な学習の時間

「地域の特色に応じた課題学習」

4 出典及び参考文献

- ・「岩手県漁業史」 岩手県編集

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

5年生の社会科で学習したことをもとに、我が国の大切な産業である水産業について興味をもたせる。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	予想される児童の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	<p>1 目標を立てても途中であきらめたり、忘れてしまったりしたことはないか話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最初はがんばったんだけど、続けることができなくてやめてしまいました。 ・むずかしくてあきらめました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちを継続させていくことのむずかしさに共感させるようにしたい。
展開	<p>2 資料を読んで話し合う。</p> <p>○ 作右衛門はなぜ新たな漁法の開発を真剣に考えるようになったのでしょうか。</p> <p>○ 9年間の努力の末、アメリカ式巾着網についての記事を発見したとき、作右衛門はどんなことを考えたでしょう。</p> <p>○ あんなバカ網で魚がとれるわけがないと文句を言われたとき、作右衛門はどんな気持ちになったでしょう。</p> <p>◎ 大漁旗をなびかせ帰ってくる船を見て、作右衛門はどんなことを思ったでしょう。</p> <p>3 把握した価値と自己とのかわりを考える。</p> <p>○ 今までに努力して達成できたことに、どんなことがありましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日食べていくのがやっただ。 ・沖にはたくさんの魚がいるのに。 ・くらしを変えるには、新しいことをやらなければだめだ。 ・これならきっと成功する。 ・9年間探していたものがやっと見つかった。 ・すぐにでも自分で試してみたい。 ・成功すればみんなのくらしもよくなるはずだ。 ・やっぱり無理だったのかな。 ・これでやめてしまおうか。 ・せっかくみんなのためにがんばってきたのに。 ・今度こそ、成功するはずだ。 ・ここでやめたら、ここまでの苦労が無駄になってしまう。 ・がんばってきてよかった。 ・自分の考えた方法をみんなが使ってくれてうれしい。 ・自分が目指してきたことはまちがいでなかった。 ・つらいときがあっても練習に休まず参加し、大会で優勝できた。 ・毎日練習を続け、二重跳びの連続跳びができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人々のことを想う作右衛門の気持ちやその目標の価値に気付かせたい。 ・新しい漁法の開発を決意してから9年間努力した末の発見であることに気付かせ、その喜びに共感させたい。 ・「やめてしまおう」という気持ちと、「成功させたい」という気持ちの葛藤に共感させたい。 ■挿絵「指導する作右衛門と大漁旗をなびかせる船」 ・作右衛門が新しい漁法を開発し、それをみんなに伝えることができたのも、あきらめずに頑張ってきたからであることに気付かせたい。 ・自分たちが経験してきたことを通して、目標に向かい努力し、達成することの道徳的価値を自覚させたい。
終末	<p>4 今の自分の目標は何か、それを達成するために何が必要だと思うかノートに書く。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・目標をもつことのすばらしさに気付かせながら、実践への意欲を高めたい。

(3) 事後の教育活動

運動会やマラソン大会などの学校行事、家庭学習の取り組みなど、目標を立てて取り組む教育活動と関連付ける。

6 参考資料等

【大越家の人々】

岩手県漁業史には、「大越家の人々」として、以下のように紹介されている。

大越家の歴史は、即ち漁具漁法改良の歴史である。そして、その歴史とは、三陸漁民の血と汗に滲んだ新漁法開発という困難の歴史の側面を投影するほどの本県漁業開拓史上、重要かつ傑出した事績の記録であった。(抜粋)

岩手県漁業史では、四代目当主作右衛門、六代目当主庄兵衛、七代目当主作右衛門について、詳しく紹介されている。「沖へのちょう戦」で主人公として取り上げたのは、七代目当主作右衛門である。

四代目当主作右衛門および六代目当主庄兵衛も新漁法開発に情熱を燃やした人物である。そして、庄兵衛については広く世間の人々のために尽くしたエピソードも残されており、七代目作右衛門にもその気質が受け継がれたものと思われる。

七代目作右衛門については、さらに以下のように紹介されている。

沖合操業の能率漁網が要望された時代にあつて、我が国初の米国式巾着網導入の成功をなし、ひいては歴史の意味において今日隆盛を極める旋網漁業発展の根元を形作ったといえる、明治時代の偉大な漁業研究者

【七代目作右衛門年譜】

元号	西暦	月	主な出来事
天保	12	1841	9月 23日 作右衛門誕生。
明治	12	1879	1月 18日 父庄兵衛永眠。父庄兵衛の遺志を継いだ作右衛門の沖への挑戦が始まる。
	13	1880	海洋の潮流を観察し、かつ魚群回遊路の道途、変遷を調査して、漁獲の多寡を左右する魚群の厚薄を精査する一方、新漁具漁法の開発に努めて、沖合漁業への進出を企てていった。 数々の漁具の改良を図り、かつ各種の考案を凝らして百般の漁網を製作し、毎年のように試験を行ったが、空しく蹉跌を繰り返すこと数年であった。 こうした失敗をたくましい胸一つに受けて、先進地の視察や老漁師の門を叩くことでその知見を広め、更には当時農商務省が講師を派遣して開く漁業講習会には遠近問わず出席して、漁具漁法の研究に専心していった。
	14	1881	
	15	1882	
	16	1883	
	17	1884	
	18	1885	
	19	1886	
	20	1887	
	21	1888	
		6月 ニシン巾着網を作り出漁。漁夫が新網の使用を好まず、1回も使わずに終わる。	
		7月 プリ巾着網をつくり、魚群をまくが網の括りが十分でなく、不本意な結果で漁夫の嘲笑をうける。	
		9月 サケ巾着網の使用を試み、14日間でサケ117尾を漁獲。従来の網を使用する他船の漁がよく、漁夫の苦情がでて、この網をサケ叩き網に改造して漁を続ける。「大日本水産会報」第72号で関沢明晴の「巾着網の解説」を読む。	
		10月 イワシ巾着網製作。資材不十分で不完全、漁夫の反発をかう。小舌網に改造して操業する。	
22	1889	網地・附属具すべて新調、漁船も新造し、サケ巾着網製作。しかし、漁夫の雇い入れ困難、親戚と菊地理助の小作人、付近の百姓まで雇い入れる。従来の網主は、これをバカ網と冷笑。	
23	1890	一層の改良を加えて操業。当初漁獲十分でなかったが、10月～1月でサケ、プリなど4千余円の水揚げを記録し、サケ漁では当地の第一位となる。千金の巨利を得、一朝にして多年の自家の失敗を回復することができた。	
24	1891	イワシ巾着網も製作。他の網主も巾着網製作を切望し、大越氏の網の熟練漁夫を雇い入れる。近郷に普及し、巾着網は計五ヶ統となる。 大越氏のイワシ巾着網・サケ巾着網ともに好漁、この網の能率の高さを実証する。この結果をみて小舌網主は舌をまいて恐れ、悪口を叩くのをやめた。	
25	1892	巾着網の普及が全国規模となる。	
26	1893	和歌山県の私立紀井水産会から巾着網の構造、使用法について、熟練者を雇い入れたい旨の要請があり、宮古町の岩船豊吉氏が3ヶ月に亘って指導に趣く。	
28	1895	4月 青森県に教師を派遣。水産伝習所の生徒が来県。	
		6月 知事の認可を得て、巾着網漁業組合を設立。	
29	1896	青森県・秋田県に教師を派遣。水産伝習所の生徒が来県。	
		三重・和歌山・宮崎の各県より視察員ならびに伝習生が来県。	
30	1897	福井県から教師1名を招へいしたい旨の申し入れがあり、大越安太郎氏が派遣される。	
		大日本水産会から水産功労者として表彰。この他、賞典を受けること10数回に及ぶ。	
		9月 12日 作右衛門永眠。	

* 本年譜は、岩手県漁業史に記載されている文章を、抜粋し表にまとめたものである。

* 七代目大越作右衛門については、岩手県漁業史の他に、「宮古史話」等にも紹介されている。

「沖へのちょう戦」は、岩手県漁業史に記載されている内容および関係者への取材により構成されている。

学びとったもぐりの技

いそざき さだきち
— 磯崎 定吉 —

1 ねらい

より高い目標を立て、その達成に向けて努力した先人の生き方にふれ、希望と勇気をもって、困難にもくじけることなく、粘り強くやり通そうとする態度を育てる。

【第5・6学年 1－(2) 希望、勇気、不撓不屈】

2 資料について

(1) 内容

本資料は、ヘルメット式潜水で、その技術を国内外で高く評価されている「南部もぐり」を開いた磯崎定吉の話である。磯崎定吉は、種市町（現在の洋野町）で千葉県の潜水夫からその技術をきびしい特訓の末に習得し、更に努力を重ねながら、日本一の潜水技術をもつと言われるまでになった。しかし、その技術を生かし生活していくことができなくなり、一時は止めようとする。それでも希望を失わず、採取漁業をすることに目をつけ、成功していった話である。難しい技術を必死になって覚えようとする姿や困難なことがあっても希望を失わず努力する姿を考えさせることにより、ねらいに迫ることができると思う。

(2) 指導上の留意点

磯崎定吉の生まれ育った種市は、夏でもやませという冷涼な風が吹き、稲作に適しておらず、大人は出稼ぎに行くという土地であった。そのような土地柄にふれながら、定吉がふるさとのことを思いながら潜水技術に目をつけたことをとらえさせたい。そして、通常、技術の習得には2～3年かかるところを3か月で覚えた定吉の努力に共感させたい。さらに、覚えた潜水技術が生かせず、生活が苦しくなってきた時の定吉の葛藤にふれさせ、それを乗り越えて自分の目標を実現させた定吉の姿に共感させることで、本時でねらう道徳的価値に迫っていきたい。そして、定吉の生き方から考えたことを自分の経験と比較させることで、道徳的実践力の高揚を図りたい。

3 他の教育活動との関連

(1) 各教科

- ・社会 第5学年「我が国の水産業」
第6学年「新しい学問 伊能忠敬」（目標をもち努力した先人）

(2) 総合的な学習の時間

「未来の自分の仕事」

(3) 特別活動

- 「マラソン大会への取り組み」「陸上記録会への取り組み」
- 「1学期の自分の生活を振り返り、2学期の目標を立てよう」

4 出典及び参考文献

- ・小学校社会科副読本「わたしたちの種市」監修 種市町教育委員会
- ・岩手の先人（第5集）編集者 日本教育会岩手県支部調査研究部

5 指導展開例

(1) 事前の教育活動

陸上記録会などに向け、自分の目標の達成のためにやらなければならないことに計画的に取り組んだり、努力したりしようとする気持ちを高めさせる。また、社会科や総合的な学習の時間で、先人の生き方を意図的に取り上げ、自分の目標を考える機会として位置付ける。

(2) 本時の展開例

過程	主な学習活動と発問 (○) ※主発問 (◎)	予想される児童の反応	指導上の留意点、資料 (■)
導入	<p>1 種市、ウニの写真を見て、気づいたことを話し合う。</p> <p>○ 県のどこに位置していますか。</p> <p>○ ウニを知っていますか。また、それをどうやって採ると思いますか。</p>	<p>・県の北の方、海に面した町。</p> <p>・栗みたいだ。</p> <p>・潜ってとる。</p> <p>・難しそうだ。</p> <p>・誰が始めたんだろう。</p>	<p>・洋野町の位置や特産物について確認する。</p> <p>■県の地図</p> <p>■洋野町HPの「概要」の中の「ウニ」の写真</p>
展開	<p>2 資料を読んで、定吉の気持ちについて話し合う。</p> <p>○ 定吉はどんなことを考えて、三村に弟子入りしたでしょう。</p> <p>○ 潜るだけでへとへとになってしまった時、定吉の心を支えたものは何だったのでしょうか。(○ 普通なら2・3年かかるのに、なぜ定吉は努力したのでしょうか。)</p> <p>○ 覚えた技術を生かせず、くらしが苦しくなってきた時、定吉はどんなことを考えたのでしょうか。</p> <p>◎ 潜水漁業で成功して、定吉はどんな気持ちになったでしょう。</p> <p>3 自分の経験を振り返る。</p> <p>○ あきらめないうで、努力し続けたことはありますか。</p>	<p>・この技術はいろいろな仕事の役に立つかもしれない。</p> <p>・せっかく誘われたのだから、この技術を覚えたい。</p> <p>・この技術は、種市の人たちのためになるという気持ち。</p> <p>・絶対にこの技術を学びとるという強い思い。</p> <p>・目標を達成したいという決意。</p> <p>・やめてしまおうか。</p> <p>・せっかく技術を覚えたのに、無駄になってしまう。</p> <p>・この技術を生かせないか。</p> <p>・あきらめないうでよかった。</p> <p>・やっと自分の目標が達成できた。</p> <p>・この技術を、種市の人々に伝えなければ。</p> <p>・陸上記録会の練習が苦しかったけれど、あきらめないうで練習して3位にされた。</p>	<p>■写真「磯崎定吉」</p> <p>・初めて潜った時の定吉の思いにふれさせ、価値への方向付けを図る。</p> <p>■写真「潜水中の様子 (HPから)」</p> <p>・潜水技術について補足し、その難しさを実感させることにより、それを乗り越えようとした定吉の強い気持ちをとらえさせたい。</p> <p>■挿絵「海を見ている定吉」</p> <p>・学びとった技術を生かせない定吉の葛藤にふれさせる。</p> <p>■挿絵「潜水漁業をする定吉」</p> <p>・自分自身や種市の人々のために、技術を習得して暮らしに生かす、という目標を実現した定吉の達成感に共感させる。</p> <p>・価値に対する自己とのかかわりを考えさせるようにする。</p>
終末	<p>4 定吉の生き方について考えたことを書き、話し合う。</p> <p>○ 定吉さんの話から、どんなことを思ったか書いてみましょう。</p>	<p>・くじけそうになっても、あきらめないうで努力すれば、目標に近づくことができる。</p>	<p>■ワークシート</p> <p>・書かせることで、価値についての考えを深めさせ、道徳的実践力の高揚を図る。</p>

(3) 事後の教育活動

- ・ マラソン大会や2学期の目標達成の取り組みについて考えさせ、実践に結びつける。
- ・ 総合的な学習の時間「未来の自分の仕事」において、目標をもつことの大切さやそのための努力についてを含めながら、考えを深めさせる。

6 参考資料等

【磯崎定吉の略歴】

明治五年（1872）	種市町に生まれる
明治三一年（1898）	名護屋丸が種市町平内沖で座礁 遭難する
明治三二年（1899）	名護屋丸の解体引き上げに来た 三村小太郎など千葉県 <small>の</small> 潜水夫か ら、定吉が潜水技術を習う
明治三十九年（1902）	十和田湖からの賽銭引き上げに 成功
大正十一年（1922）	病気により死亡

【参考となるHP】

- ・ 画像検索をするには（海の作業の様子が分かる画像がたくさん掲載されています）
「南部もぐり」を検索～「南部もぐりの画像検索結果」
<http://www.iwatesan.com/iwate-nature/22-nanbu-moguri01.html>
- ・ 洋野町HP <http://www.town.hirono.iwate.jp/outside/taneichi/index.html>

【定吉にかかわるエピソード】

- ・ 定吉は、弟子の育成に房州潜りと同じ徒弟制度を採用した。それは、雑役夫1年、ポンプ押し1年、綱夫1年、見習潜水夫2年、計5年間の間、無休で親方（定吉）の家に住み込ませ、日常生活の中で潜水技術をマスターさせる方法であった。また、潜水夫は命を張って、水中で孤独と戦いながら仕事をしなければならないことから、肉体だけでなく精神面も大切と考え、弟子の期間中に訓話等も行い厳格に育てた。
- ・ 定吉は、当時「聖なる湖」と言われ多くに人から恐れ敬われていた十和田湖からの賽銭引き上げ作業の際、十和田青龍大権現に「われに50年の年月を与えたまえ。われ、南部潜りの始祖たらん」と祈願したと言われている。そして、奇しくも大正11年11月29日、50歳と11か月でその生涯を閉じている。

【他教科との関連で活用できる資料】

- ・ 岩手県版小学校社会科副読本「あたらしいきょうど岩手」
～ 中単元「岩手県の様子」 岩手県地図や航空写真など

【磯崎定吉について研究している方】

酒井久男氏（洋野町）

（洋野町の種市小学校の4年生が「南部潜りの開祖 磯崎定吉」について、酒井氏を招いて学習した様子がウェブ上で公開されています。）